

まえがき

非西欧地域のさまざまな地域の在来の知識 (Indigenous Knowledge, Local knowledge) の体系は、「民族科学」(エスノ・サイエンス) と総称される。「民族科学」は医療、薬物、動植物、地理、宗教、法など、生活の様々な局面において、地域の環境と歴史と結びついて創造され、継承されてきた地域固有の在来の「知」の体系である。このような在来の「知」の体系は、我々が慣れ親しみ、知識や視点の拠りどころとしている近代西欧科学に対して、2つの点で重要な役割を担っている。

ひとつは、西欧科学による在来の知の利用である。世界の諸地域の多様な知識や実践は、近代西欧科学に対して、新たな分析材料や補完的役割を提供することができる。たとえば、地球温暖化現象による熱帯病の伝播に対する危惧から、熱帯地方で用いられている薬用植物が薬学的分析の俎上にあがるようになってきたり、世界各地の民族固有の医療が、生物学的身体のみを対象とする西欧医学に対して心身を全体的に取り扱う補完的医学として注目されている。これらは、在来の知をいわば断片化して西欧近代科学の枠内に取り込もうとする試みだと言えよう。

もうひとつは、在来の知の体系を西欧近代科学に並置して、西欧近代科学自体を相対化するという役割である。この場合は、在来の知の体系を支えている地域固有の価値観を含めて全体として、西欧近代科学そのものを再考し、問い直す視座を提供することとなる。このような試みは端緒についたばかりで、具体的な考究は今後の課題である。

世界の諸地域で育まれてきた在来の知は、近年のいわゆるグローバル化の波に洗われて、存亡が危うくなってきている。しかし、後世に伝えるために百科辞書的な記録作業をおこなったり、保全策を講じるだけでは、本来、在来の知が持っている自己変革のダイナミズムを奪ってしまうことになる。在来の知は、決して「地域の昔ながらの伝統の知恵」ではなく、西欧近代科学を含めて外来の知との接触と交渉によって、常に創造を繰り返し、今後とも変化を遂げていく動的な知識システムなのである。このような意味での「生きた在来の知」を西欧近代科学と対比しながら、人類の新たな知として活用していくことが学的営為として必要とされる課題である。

本プロジェクトでは、このような課題の基礎作業として、アジア・アフリカ地域における在来のさまざまな知の体系が現代においてどのような状況にあるのか、また、どのような内在的論理を持っているのかについて記録と分析をおこなった。本書はその成果をとりまとめたものである。総花的な報告集ではあるが、在来の知の多様な現状と可能性を示したものとして、ご一読願えれば幸いである。

2009年3月

研究代表者

富山大学人文学部 竹内 潔